

# The Hop Step Times

June 2024

## The Introduction of GROUP PRESENTATION (グループプレゼン紹介)

本プログラムは、職場を想定し1か月間のグループワークを通して自身の思考や癖を見つけたり、他者からのフィードバックにより自己理解を深めるものである。

2月初旬から3月中旬にかけて、「コンセプト「涙」としてS氏送別会の企画、開催」を課題に活動した。S氏とは、3月末で退職され、心理士として、また、ほっぷの主導者として、利用者の癖や特性を本人に気づいてもらうことを軸に寄り添い、時には厳しい言葉を以って支援に当たってこられた方である。

送別会を催すにあたり、出し物と贈り物について話し合いが行われたが、どちらも非常に難航した。

贈り物については、写真立て等が挙げられたが、S氏が車中泊をしながらご自慢のカメラで写真を撮る旅を予定されているので旅に便利なものがよい、感謝の思いが詰まったものを贈りたいという意見から、LEDランタンと手作り花束に決定した。又、時々ほっぷのことを思い出してほしいという思いから、ランタンにほっぷのイメージキャラクター「ほっぴょん」のデザインが施された。手作り花束は、スタッフやグループプレゼンに参加していない利用者を含め皆で制作し、一輪ごとに個性ある華やかな花束に仕上げられた。

出し物については、沢山のアイデアが挙がったものの、ありふれたものばかりでサプライズ感が足りない、S氏に何を感じていただくの目的が不明といった理由から上司役スタッフの承認を得られなかった。リーダーは、この状況に頭を悩ませた。時間の経過とともにメンバーの不安が増し「本当に間に合うのか？」という声が出始めた。メンバーは、リーダーの疲れた表情を見て相談することを躊躇し、更に状況が悪化してしまう。諦めの言葉を発するメンバーも出てきたのである。そんな危機的状況の中、「S氏がグループワークを利用者視点で体験してもらうと今後に活かしていただけるのでは?」、「最後に利用者との思い出を作してほしい」との意見が挙がりメンバー全員が賛同。ワークの内容が「特別ルール7並べトランプ」に決定したのは送別会前日のことである。その後、ほっぷで大事にしていることである。「主体性を持ち、困った時は相談、確認しよう」をポイントに急ピッチで特別ルールが検討された。その結果、本ワークではチーム対抗戦とし「パスを少ない回数で7並べを完成させたチームの勝ち」とし、周囲へ自分の考えを発信することが苦手であっても、自分が出してほしいカードのヒントを周りに発信していかないといけない協調性が求められるルールとした。



贈り物(ランタンと手作り花束)

7並べの様子

尚、「ヒントとして出していいのはカードの大小と色のみ」という制限が設けられた。企画がまとまり安堵の空気に包まれた。

送別会当日、S氏を別件で呼び出していた会場に、突如送別会開催が発表されS氏の「何?」という驚きから始まった。グループワークの主旨が伝えられS氏は「なるほど」と頷いた。S氏は、コミュニケーションがうまく取れなかった利用者が、積極的に声をかけ相手の心情に配慮しながら会話を交わし、協力して勝利という一つの目標へと向かう一人一人の姿を見守るように参加された。「S氏に満足いただけるのか」、その心配をよそに自ら思い出を作るかのように満面の笑みで成長した利用者との最後の交流を楽しまれた。会場の歓喜は途切れることなく終わった。

次に、利用者代表から送辞が読み上

げられた。自分と向き合うことができたことや癖の根本に気付けた等、感謝の言葉に溢れ代表者の目は涙で滲み声が震えていた。送辞後、ランタンと花束が贈呈されS氏が皆に返した。「送別会をしていただけたとは全く予想していなかった。とても嬉しい」。S氏の目に涙が映っていた。この涙に全員が確信したのである。「送別会成功だ!」

筆者は、S氏の偉大さをあらためて痛感するとともに感謝の念に堪えない。もうS氏の毒舌フィードバックが聞けないと思うと非常に寂しく不安だが、気を引き締めプログラムに取り組む所存である。

最後にスタッフ、利用者全員の声をS氏へ届ける。「Sさん、ありがとう!」

## The Introduction of Program (プログラム紹介)

4月某日、ほっぷのプログラムの一つであるホームルームが実施された。これは利用者が今の自分たちの状況に合わせてその時間をどのように過ごすかを話し合っただけで、実施するプログラムである。この日の内容は「ほっぷで新しく導入するカードゲームを考える」であった。

導入するゲームの候補としてゲーム名を挙げていくうちに、「皆で協力しながらできるものにしてはどうか」という意見が出た。ほっぷには利用者同士の交流を目的にトランプなどのゲームが置かれているが、これらは勝敗を決定するゲームである。そうではなく、全員で協力して何かを達成するものを新たに足したいという趣旨から出ていて、この意見に皆共感した。また、「プレイ人数が少ないものよりは多くの方が参加できる方が、ゲームを機会に新しいコミュニケーションに繋がっていきけるのでは」といった声も挙がり、プレイ人数なども気にしながら候補の選定を進めていった。いつものホームルームでは、なかなか活発な意見出しが行われないが、この日は内容の影響もあってかたくさん意見が聞けてとても良い雰囲気が進められていたように感じた。

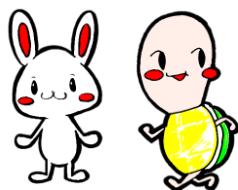
最終的に「ito」と「ザ・クルー」という2つのゲームが候補に挙がった。どちらもプレイヤー全員で挑戦し、課題達成を目指す協力型ゲームである。itoとは、数字を口に出してはダメという条件で、自分に配られた数字を「言葉」で伝えるゲームだ。会話にはテーマが設定され、例えば「アニメキャラクターの人気度」などを使って他プレイヤーに教えなければならない。

周りの数字を推測するためにコミュニケーションの練習にもなるし、価値観の違いが見えることも魅力的なゲームである。

対して、ザ・クルーとは宇宙でのミッションを模したゲームで、最たる特徴はプレイ中に会話ができず、ゲーム内で使用できるカードを使って意思疎通を図るというものである。

一見するとザ・クルーではコミュニケーションに繋がらなさそうだが、ゲーム内で会話できない分、ゲーム後に互いの感想やゲーム内での考えを言いたくなり、活発な会話につながるのではないかと考えが提示され、議論の結果「ザ・クルー」が選ばれた。

後日、実際にカードゲームが導入されたが、ザ・クルーを見つけられなかったため、itoが新たにほっぷに導入された。itoはお昼休み等に利用者同士で実施され、筆者も参加したところ課題達成に向かってコミュニケーションを行い、新たな価値観の共有が出来るとも面白い体験ができた。また、周囲との意思疎通にゲームが有用であることや、楽しさから新たな会話が生まれるのだという発見に繋がって良かったと思う。ザ・クルーは今後の導入検討が続いているため、入った際には皆と会話しながら楽しみたいと思う。



## The Introduction of Committee (委員会活動紹介)

5/1(水)より、ほっぷにおける委員会活動が開始された。「図書委員会」、「環境整備委員会」、「新聞委員会」の3つが発足され、利用者全員がいずれかの委員会に所属することとなる。各委員会の大まかな活動方針はスタッフから提示されるが、具体的な活動内容や活動時間は委員会のメンバーが決定し、月末の定例報告会にて活動の成果を全体に共有する方針である。

「図書委員会」は、ほっぷにおける蔵書の管理を主たる活動とし、本棚の整理、蔵書リストの作成、新規書籍の選定等を担当する。「環境整備委員会」は、ほっぷにおける環境の整備を主たる活動とし、物品棚の管理、不足物品の洗い出し、観葉植物の世話等を

担当する。「新聞委員会」は、元々ワークコースの参加者が担当していた、本紙「The Hop Step Times」の作成を引き継ぎ、これまで通り、本紙の記事の作成、発行状況の周知等を担当する。なお、各委員会の活動内容は、本紙の1コーナーとして不定期に掲載を予定している。

委員会活動の成果は、利用者全体を取り巻く環境を変化させるものであるため、そうした意識と責任を持って活動に取り組む必要があると筆者は考える。また、主体性や協調性の向上を目指して、委員会活動に邁進していく所存である。

## The Message from GRADUATES (卒業生メッセージ)

本紙は某日、卒業生A氏にアンケートを実施した。A氏は約7か月通所したほっぷを卒業し、11月に復職したメンバーである。本記事ではアンケートやご本人へのヒヤリングから以下を抜粋し紹介する。

- Q1. あなたにとって良かったプログラムを教えてください。  
A1. 「アサーション×SST」思いついた事をそのまま言ってしまうのではなく立ち止まって考えて話すことの大切さに気付かされたから。  
Q2. ほっぷ通所前と現在とで、変わったと思う自分の行動や考え方、気付いたこと等あれば教えてください。  
A2. 自分本位で考えている事が実は他の人はそうではない事が多い事に気付いた事。

- Q3. 最後に、残されるメンバーにメッセージをお願いします。  
A3. みなさんの持っている本質を知り、向き合う事が出来れば今までは違った考え方が出来ると思います。周りはそんなに変わらない、変わっていないという事を前提にしてほっぷのプログラムを実行していければと思います。

立ち止まることを意識しプログラムに取り組んでいたA氏。特に他者の意見をしっかりと聞く事を大切にしようと真摯に取り組んでいた。復職し職場内では立ち止まる事は中々難しい事だと思いが、ほっぷでの経験を生かし活躍されることを願う。